

.....

科学文明の発達は、1世紀前に期待されていたもの、またそれ以上のものを実現し、人類の生活のすみずみまで行きわたり、日常化されたばかりか、人類の行動範囲を宇宙空間にまで拡大した。ところが、人類が自らの住む地球を振返ったとき、史上いまだかつてないほどの重大な岐路に立っているのを知った。

人類の明るい未来を約束した科学文明は、一方では戦争技術と結びつき、人類自らが核兵器の脅威にさらされることになったのがそれである。いまや人類は皮肉にも人類自身が科学文明の奴隷になり、そこからの解放を求めなければならなくなった。そのためには豊かな人間性を回復する人間自身の進歩が必要となったのである。

こうした人間性回復の必要性は第2次世界大戦を契機としてすでに深く感じとられていた。人間性を忘れた発展はここで反省の時期に入り、異なる種類の価値が求められるようになった。これまでの万国博は欧米的な性格のものであったが、日本万国博では東洋的な性格を持たせることを意図した。それが「調和」の思想であり、この思想をとり入れた「進歩と調和」の理念は、明らかに日本万国博が新しい歴史的次元に立つものであることを示したのであった。

日本万国博がめざしたものは、世界にはさまざまな文明が多元的に共存することを、理解と寛容の精神によって認め、それらの多様性の調和の中にこそ進歩が望まなければならない、という「調和的發展」の精神であった。これは東洋思想の「和」の心を現代世界に呼戻して、東西を結ぶ新しい理念として発展させようとするものであった。

「調和的進歩」の精神の根底には、人間の生命自体の尊重がなければならない。そして、さらに、人間らしい生きる喜びをつくり出す「生命の躍動」がなければならない。これが人類の偉大な未来を築くのである。

現代では、文化は1国、1地域だけで進歩するものではない。世界の多様な文化の特徴と、その良さを尊重し、世界の諸民族がお互いの文化を理解しあってはじめて、人類の進歩がある。この意味で、今日ほど世界の協力と理解、人類全体の調和、つまり世界の平和的發展が強調されなければならない時代はない。

博覧会はいままでもなく哲学者の会議場でも、商人が利益を求める見本市でもない。それは、参加各国の文化的遺産や創造的活動などの展示を通じて、平和を願う人間交歓の場である。日本万国博は、この博覧会の精神が、広く学びとられ、人類の希望をつなぎ、歴史の転換期を開くにふさわしい意義のある博覧会であった。

博覧会はまた、現実の世界を直接改革する場ではない。しかし、日本万国博は新しい時代への機運をつくり、あすへの道標とモデルを積極的に提供することによって、未来社会へのかけ橋を築く手がかりを示した。それは課題の解決ではないが、問題の提起と、解決への展望を示すものであった。

.....

基本理念 開けゆく無限の未来に思いをはせつつ、過去数千年の歴史をふりかえるとき、人類のつくり上げてきた文明の偉大さに、私たちは深い感動をおぼえるのである。とくに近代における科学と技術の進歩は、人類の生活の各方面にわたって人々がその前夜まで想像もしなかったような大きな変革をもたらした。しかも文明はさらに前進の歩みをはやめ、人類の未来の生活は今日の私たちの予想をはるかに超えたものとなってゆくであろう。

万国博覧会は、1851年にロンドンで第1回が開催されて以来、欧米の各地において開かれてきた。そしてそのときどきの世界各国の創造的活動の成果を集約的に展示して、それぞれの時代の進歩を確認し、新しい発展への強い刺激を提供することによって、人類文明の向上に大きな役割りを果たしてきたのである。私たちも、1970年を期して、大阪において、国際博覧会条約にもとづく万国博覧会を開催しうることとなった。私たちは、過去における万国博覧会の慣例と成果を尊重しつつ、しかも東西を結ぶ新しい理念にもとづいて、このアジアにおける最初の万国博覧会を人類文明史にとって意味あるものであらしめたい。すなわち、現代文明の到達点の指標であると同時に、未来の人類のよりよき生活をひらくための転回点としたいのである。

しかしながら、世界の現状をみると、人類はその栄光ある歴史にもかかわらず、多くの不調和になやんでいることを率直にみとめざるをえない。技術文明の高度の発展によって、現代の人類は、その生活全般にわたって根本的な変革を経験しつつあるが、そこに生じる多くの問題は、なお解決されていない。さらに世界の各地域には大きな不均等が存在し、また、地域間の交流は、物質的にも精神的にも、いちじるしく不十分であるばかりか、しばしば理解と寛容を失って、摩擦と緊張が発生している。科学と技術さえも、その適用を誤るならば、たちまちにして人類そのものを破滅にみちびく可能性を持つにいったのである。

このような今日の世界を直視しながらも、なお、私たちは、人類の未来の繁栄をひらきうる知恵の存在を信じる。しかも、私たちは、その知恵の光が地球上の一地域に局限されて存在するものではなく、人間あるところすべての場所にあまねく輝いているものであることを信じるものである。この多様な人類の知恵がもし有効に交流し刺激しあうならば、そこに高次の知恵が生まれ、異なる伝統のあいだの理解と寛容によって、全人類のよりよい生活に向っての調和的発展をもたらすことができるであろう。

1970年の日本万国博覧会は、このような信念と希望にもとづいて設計されるものである。世界のすべての国民がそれぞれに発展させてきた英知とその成果を、誇らかにここに持寄られることを期待する。そこに人類協和のよろこばしい一つの広場が出現するであろう。ながい孤立を脱して世界に門戸をひらいてから百年をへた日本が、いまこうした博覧会を開催しうるにいったことは、この上ない喜びである。

いまこそ新しい時代が始まらねばならない。20世紀は偉大な進歩の時代であるが、同時に今日までは苦悩と混乱を避けることができなかつた。私たちはこの世界を、完全な平和が支配し、真に人類の尊厳と幸福をたたえうるところのものとして、次の世代につたえたい。この万国博覧会がそのようなよき時代への転回点として役立ち、その場所と機会を提供しえたとするならば、私たちの光栄はこれに過ぎるものはないのである。

.....